

僕と先祖を結ぶ小指

福井県立金津高等学校

友田 竜将

「よし、準備は完璧。忘れ物もなし」

三年生が引退して新チームになった。明日は高校生になって初めての試合だ。適度に緊張はしているけど、ワクワクした気持ちの方が大きい。なにしろ中学三年の夏の地区大会で負けてから、ずっとバスケットの試合をしていない。受験勉強の合間に気分転換を兼ねて一人でドリブルとかはしていたけど、本格的な実践は一年ぶりだからとても楽しみだ。僕は明日に備えて早めにベッドに入った。すぐにウトウトしてきた。

「あっ！まずい」

僕は大切なことを忘れていた。バスケットを始めた小学校一年生の時から必ず行う儀式みたいなジंकクスみたいな、大切な決まり事。それは、試合の前日には必ず足の爪を切る事だ。爪が長いとバスケットシューズにあたって爪が割れたり、血豆になったりして大変なことになる。ずっと試合をしていなかったのですっかり忘れていた。

部屋の明かりをつけて足の指を確認するとやっぱり爪が伸びている。

「やっべ、夜に爪切るとお母さんに怒られるな」とドキドキしながら爪を切り始めた。

体が硬いせいもあるけれど、足の爪ってなんでこんなに切りにくいのだろう。特に小指。他の指は真っ直ぐなのに小指だけは内側に曲がっている。右も左も極端に曲がっている。慎重に爪切りをあてても肉まで切ってしまうようだ。しばらく頑張ってみたけれど、どうしてもうまく切れない。怒られるのを覚悟で母の部屋まで行って小指の爪を切ってもらった。てっきり怒られると思っていたけど、母は笑いながら、

「ほら、見て。お母さんの足」

と言いながら靴下を脱いで足の小指を見せてくれた。

「え！曲がってるじゃん。しかも僕の小指と同じくらいグニャって曲がってるよ」

と叫んでしまった。僕の特徴的な足の小指は母からの遺伝だと知って驚いた。念のために父の足の指も確認すると普通に真っ直ぐな小指だった。

そしてもっと衝撃的な話を母から聞いた。母方の祖父も足の小指が曲がっているそうだ。僕の小指は名古屋の祖父から受け継がれているのだと思うと不思議な感じがした。母の記憶では僕の曾祖父も足の小指が曲がっていたらしい。

僕は曾祖父に一度も会ったことはない。でも曲がった小指の形で繋がっている気がする。もしかすると、僕の先祖は代々この曲がった小指の持ち主なのかもしれないと考えると、爪は切りにくいけれど、曲がった小指も嫌いになれない。

僕と母、そして祖父や曾祖父、先祖を「結ぶ」特徴ある足の小指が、見えない一本の糸で結ばれているようで嬉しい気持ちになった。

試合が終わった。勝負は一步及ばず、残念な結果だったけど、それは僕が足の爪をきるジंक
スを忘れていたせいかもしれない。

腰を下ろしてバスケットシューズを脱いだ。少しでも足を楽にしたいと靴下も脱いだ。特徴的
な小指が出てきた。いつも通り内側に大きく曲がっている。この指の形が、僕と家族を結んでい
るようで嬉しくなった。

次の大会は秋の新人戦だ。今度こそは負けたくない。だから試合前日の爪切りの儀式は忘れて
はいけないと思った。

少し切りにくいけど、僕の子どもにも受け継がれていくかもしれない曲がった小指は過去と未
来を結ぶ大切な証だ。